

二十六世観世宗家 観世清和師・観世三郎太師 父子を
観世流発祥の地・結崎に
お迎えして開催させていただきます。

撮影・政川慎治

第三部
十五時三十分開演
狂言「二人袴」
能「石橋」
山階 彌右衛門
山本 麗晃
野村 裕基
野村 萬齋



日本全国 能楽キャラバン!

結崎 観世能

能楽観世流発祥の地

観阿弥生誕六九〇年

世阿弥生誕六六〇年記念

第一部
十二時開演
能「翁」

観世 清和
観世 三郎太
野村 萬齋



第一部
十四時開演
能「羽衣」

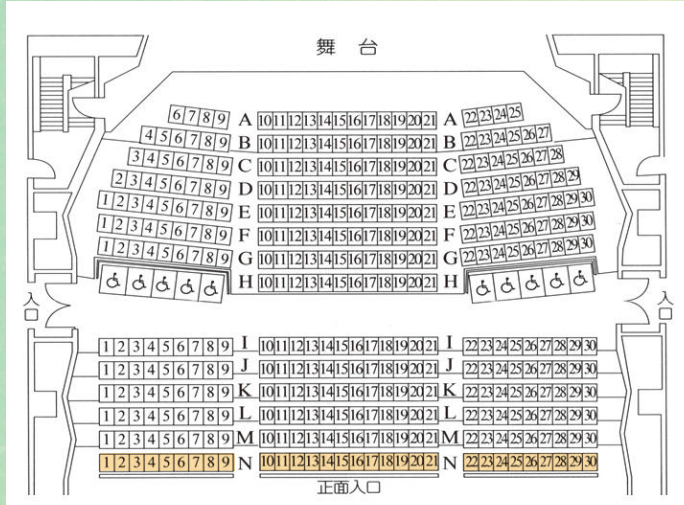
山本章弘



令和5年
7月11日(火)

会場 川西文化会館 コスモスホール
奈良県磯城郡川西町結崎32-1

座席表



N列が自由席エリアです

料金

1日通し券 8,000円
(指定席) ※開場時間: 11時30分

第1部・第2部・第3部 各 3,000円
(エリア自由席) ※開場時間: 開演の20分前

- ・会場内でのマスク着用・手指消毒・ご来場前の検温など、状況に応じて、ご協力をお願いいたします。
- ・許可無き撮影・録音はご遠慮ください。
- ・会場内では携帯電話の電源を必ずお切りください。
- ・出演者は、都合により変更になることもございますがご了承下さい。

チケット取扱い

◆川西文化会館
(9時～17時/祝日のみ休) 窓口販売のみ
TEL 0745-44-2214 (川西文化会館事務局)

◆山本能楽堂
ホームページ <http://noh-theater.com>
TEL 06-6943-9454 (平日10時～17時)
Eメール ticket@noh-theater.com

助成: 文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
文化庁文化芸術振興費補助金
(統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業(アートキャラバン2))
独立行政法人日本芸術文化振興会

主催: 公益社団法人 能楽協会
公益財団法人 山本能楽堂
 96th 山本能楽堂 能楽きやらばん

結崎—能楽観世流発祥の地

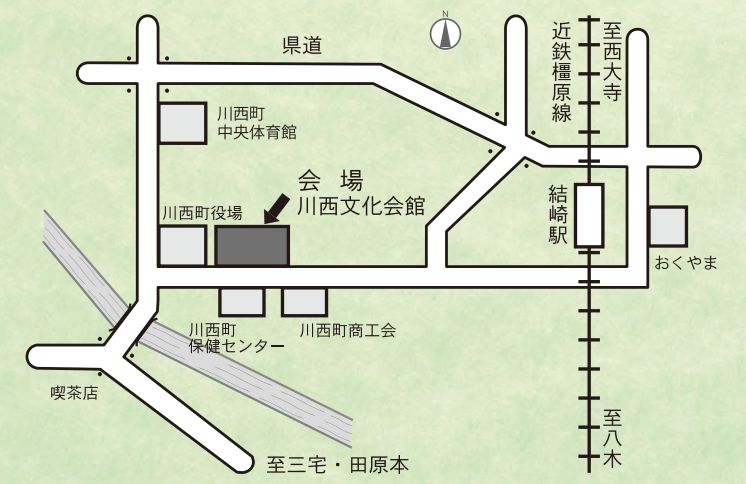
奈良盆地のほぼ中央にある川西町結崎は、能楽観世流の発祥の地として知られています。

この度、その結崎の地に、観阿弥・世阿弥の御子孫であり、二十六世観世宗家 観世清和師・観世三郎太師 父子をお迎えして能楽公演を開催させて頂くことになりました。奇しくも本年は、観阿弥生誕690年、世阿弥生誕660年の大きな節目の年にあたり、またとない大変貴重な機会でございます。

どうぞみなさま、お誘いあわせの上、多数ご来場下さいますようお願い申し上げます。

※第1部の「翁」の公演では、開演から「翁渡り」が終るまで、客席への出入りができませんので、予めご了承くださいませ。

会場



川西文化会館 コスモスホール

〒636-0202 奈良県磯城郡川西町結崎32-1
TEL 0745-44-2214 (川西文化会館事務局)

【お車でご来場の場合】
西名阪自動車道「法隆寺IC」より約4km(約9分)
「大和まほろばスマートIC」より約3km(約7分)
無料の駐車場がございます

【電車でご来場の場合】
近鉄電車 橿原線「結崎駅」から徒歩約15分

*「日本全国 能楽キャラバン!」は、「こころ弾む」をコンセプトにかつてない規模で日本全国をまわる能楽の祭典です。

番組

第一部

十二時 開演

翁

観世 清和 面箱 内藤 連 大鼓 河村 大
 三番叟 野村 萬斎 脇鼓 成田 泰 笛 杉 信太郎
 千歳 観世 三郎太 頭取 飯田 清一
 脇鼓 曾和 伊喜夫

後見 坂口 貴信 大根 祥丸 杉浦 豊彦
 山階 彌右衛門 大西 礼久 上田 貴弘
 地謡 吉井 基晴 浦田 保浩 上野 朝義
 浦田 保浩 井上 裕久

三番叟後見 野村 裕基
 石田 幸雄

終了予定 十三時頃

第二部

十四時 開演

仕舞

老 松 上野 朝義
 小袖曾我 大西 礼久 山本 麗晃
 生一 知哉 浦田 保浩
 井上 裕久 井戸 良祐
 鐘之段 梅若 猶義

能

羽衣

山本 章弘 大鼓 守家 由訓 大鼓 上田 悟
 ワキ 福王 知登 小鼓 古田 知英 笛 左鴻 泰弘
 喜多 雅人

後見 松浦 信一郎 山田 薫 生一 知哉
 梅若 猶義 笠田 祐樹 波多野 晋
 山中 雅志 浦田 保浩

終了予定 十五時頃

第三部

十五時半 開演

狂言

二人袴

舅 野村 裕基 舅 石田 幸雄
 親 野村 萬斎 太郎冠者 岡 聡史

半能

山本 麗晃 後見 内藤 連
 山階 彌右衛門 大鼓 谷口 正壽 太鼓 前川 光範
 ワキ 福王 和幸 小鼓 飯田 清一 笛 左鴻 泰弘

石橋

大獅子 大槻 裕一 浦田 保親
 後見 生一 知哉 山中 雅志 吉井 基晴
 上田 貴弘 井戸 良祐 山本 章弘
 地謡 大西 礼久 梅若 猶義
 台後見 山田 薫 笠田 祐樹 梅若 秀成 田中 誠士

終了予定 十六時三十分頃

翁

「翁」は、「能」にして能にあらず」と言われ、他の演目とは別格に扱われ、神聖視されている特別な演目です。能が成立する以前の古い形を留めており、その源流は歴史の彼方であり、謎に包まれていきます。世阿弥時代にはすでに神聖な曲として扱われていました。儀式的な要素が強いため、他の能のように演劇的な物語はありません。シテ方の演じる「翁」と「千歳(せんざい)」、狂言方の演じる「三番叟(さんばそう)」の三人が登場し、演者は神となつて天下泰平、国土安穩を祈禱する舞を舞います。地謡や囃子方などの役者も全て、直垂に長袴、侍烏帽子を着用した最も格の高い正装で演じることも特徴的です。

羽衣

ある春の朝、三保の松原に住む白龍という漁師(ワキ)は釣りに出かけた浜辺で、松の枝にかかった美しい衣を見つけます。あまりにも美しいので、持ち帰り家宝にしようとしたところ、天人(シテ)が現れ、その羽衣を返してほしいと声を掛けます。はじめは聞き入れず、返そうとしなかつた白龍も、羽衣がないと天に帰れないと嘆き悲しむ天人の姿を哀れに思い、天人の舞を見せることに引き換えに衣を返すことにします。

羽衣を返してもらつた天人はよろこんで、羽衣を着けると、月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色の美しさを讃えた舞を舞い、天地を祝福し数々の宝を与え、やがて三保の松原から浮島が原へ、さらに富士の高嶺へと舞い上がり、ついには大空の霞に紛れて消えていきました。

二人袴

世間知らずの聾(むこ)は、万事につけて父が面倒をみるせいか《聾入り》に二人で行くのが恥ずかしく、親に舅の家の前まで付き添ってもらいます。父はただちに引き返すつもりでしたが、舅に見つけられ、そろつて座敷へ出るようにと請われます。しかし、威厳を出すための袴が一枚しかないの、二人で代わる代わるにはき換えて舅の前に出て挨拶をしますが、今度は二人いっしょにと呼ばれてしまいます…

《聾入り》とは、婿養子として妻の籍に入る事ではなく、婚礼後に初めて妻の実家を訪問する『挨拶儀礼』を指します。

石橋

石橋とは、中国・清涼山(しょうりょうせん)にあるという大きな石の橋のことです。これは人間が作った橋ではなく、自然と出現した橋で、三千メートルの深い谷にかかり、幅は三十センチもないのに九メートルもの長があり、石の橋で表面は苔でおおわれていて、つるつると滑りやすくなっています。その橋を渡ることができれば文殊菩薩の浄土に行くことができると言われています。

その石橋の上に文殊菩薩の使いである伝説上の靈獣・獅子が現れ、咲き乱れる牡丹の花に戯れつつ、雄壮な獅子舞を舞つて千秋万歳を祝います。複数の獅子が登場する際は、白獅子を親、赤獅子を子とする心で舞うといわれ、白は威厳を持つて重々しく、赤は若くキビキビと動きまわります。獅子舞の途中に白獅子が赤獅子を蹴落とす型が存在しますが、これは「獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす」という故事に由来し、突き落とされた子に、自分で這い上がる力を身に付けさせるためだといわれています。